今日いまだ煮えたぎる古の憎悪

ガーナー・テッド・アームストロング著

イスラエルとアメリカに対する、イスラム教アラブ人の心の中で煮えたぎる憎しみは政治的なものでも、近年芽生えたものでもありません。それは何世紀にもわたり衝突し、戦い、傷を舐め、また戦争に明け暮れてきた何世代もの家系から受け継がれた古の憎悪なのです。キリスト生誕から6世紀後に偽りであるイスラム教が誕生し、アラブ中に広がり始めた時よりも、ずっと以前から存在するものなのです。

今日、爆撃、虐殺、殺人が起こるたびに、イスラエルと中東諸国の戦闘員の間にやりきれない怒りや衝動的な憤怒、そして憎しみを引き起こしています。これは長年の時を経て、双方とも本来の争いの原因を忘れてしまったからなのです。そのため、イスラエルがテロリストを殺害したり、テロリストが自爆テロにより自らとその被害者達を粉々に吹き飛ばしたりする度に、更に暴力的な復讐の誓いへと昇華してしまうのです！

アラブ人がイスラエル人を攻撃し、イスラエル人は反撃して、アラブ人達を殺害または拘束します。責任者達の住居は破壊され、アラブ人がまた復讐を誓います。この終わり無き暴力の連鎖の本質は政治的なものではなく、実際には、宗教的および民族的なものなのです！こうして継続されていく殺気に満ちた怒りの奥深さを理解するためには、中東の民族や宗教の起源を理解しなければなりません。

アラブ人は自ら、ハガルとアブラハムの間に生まれたイシュマエルという男児の子孫である事を認知しています。エジプト人であったハガルは、アブラハムの妻サライ（別名：サラ）の召使いでした。しかし、サライはハガルに嫉妬し、彼女とその生まれたばかりの息子”イシュマエル”を追放したのです。実際、アラブ人の間でよく使われる名は、アブラハムに由来する「イブライム」、そしてイシュマエルに由来する「イスマイル」があります。イシュマエルに関して大変印象深い予言があります。「彼は多くの国家の父となるだろう。」「彼は砂漠の猛者となるだろう。」そして、

彼は同胞である「イサク（後にアブラハムに産まれた嫡出子）やその息子ヤコブ（後のイスラエル）、及び彼の末裔となる１２の部族に対して常に共在（あるいは共存）し、イシュマエルとイスラエル、及び彼の子孫との間に絶えることのない問題があり続けるだろう。」と、供述されているのは興味深い事柄です。このアブラハムの二人の息子の間に始まった古の嫉妬と競争心を知ることによってのみ、今日の何百万ものアラブ人の心の中に煮えたぎる憎しみを、本当に理解することが出来るのです。

この事は創世記**16**章に記されています。「さて、アブラムの妻サライには子供ができなかったが、彼女にはエジプト人のハガルという召使いがいた。（注**:**ヘブライ語でハガルは『逃走』という意味です”］。

“そして、サライはアブラムに言った。『お聞き下さい。主は私に子共をお授けになりません。ですから、どうか私の召使をお娶り下さい。そうする事によって、私は彼女を通じて子供を持てるかもしれません。』そして、アブラムはサライの言葉を聞き入れた。

“アブラムの妻サライはそのエジプト人の召使いであるハガルを夫のアブラムに彼女を妻として与えた。これは、アブラムがカナンの地で１０年を過ごした後の事だった。

“こうして彼はハガルの元へ行き、ハガルは身ごもった。彼女は自分が身ごもったのを知った時、その女主人を卑下の目で見るようになった。

“サライはアブラムに言った。『私が受けた侮辱はあなたのせいです。私があなたにあの召使いを抱かせてあげたのに、彼女は自分が身ごもったと知ってから、私を卑下するようになりました。主が私と貴方の間を裁かれますように。

“しかし、アブラムはサライに言った**,**まあ聞きなさい。お前の召使いはお前のものである。お前の好きなようにすればいい。そして、サライが彼女を厳しく取り扱ったので、彼女はサライの目の前から逃走した”（創世記１６：１－６）

これは明らかに、ハガルが単なる奴隷以上の身分だったことが示唆しています。召使いと女主人という関係を保ちながらも、彼女とサライは親しく、内心の友であっ

たのかもしれません。ハガルがその事に同意していた事を見ると、彼女が強姦の被害者 － 神の法とは異なる人間の聖書解釈 － としてではなく、二人で共にこれを企て、世界初の代理母例を生み出した事は正に明らかです。

サライの受けた屈辱は、現代の女性には理解し難いものです。その当時、妻が不妊である事は恥ずすべきことでした。彼女の夫は興味を示さなかったのか。彼は勃起不全だったのか。彼女は本当に妊娠出来なかったのか。それとも、夫を拒んだのか。避妊の妻は、このような噂や疑惑に必ず蔑まれるのが常でした。妻の究極的な目的はその夫に子供を授ける事にあり、その子孫の母となり、血統の受け継ぎを保ち、家名を消滅させない為でした。その当時、女性が仕事を持ったり、政治に関与するということは、考えられない事だったのです。

さて、サライの迫害のせいでその姿を消したハガルに、その後何が起こったのか見てみましょう。「主の天使は荒野の泉のほとり、すなわちシュルへ向かう道にある泉のほとりで、彼女を見つけた。

“そして主の天使は言った，サライの召使いハガルよ、お前はどこから来たのですか？そして、どこへ行くのですか？ 彼女は言った，私は女主人のサライに見つからぬよう逃げているのです。

“そして主の天使（ヘブライ語で「使い」の意）は彼女に言った，お前は女主人のもとに戻り、その手に身を委ねなさい。

“主の天使は彼女に言った。『私がお前の子孫を増やします。その数は数え切れぬ程となるでしょう。

“さらに主の天使は彼女に言った，よく聞きなさい，お前は今身ごもっています，そして男児を産みます，さればその子をイシュマエルと名付けなさい；（注：「イシュマエル」は”神は聞きたもう“の意）。これは主がお前の苦難をお聞き届けになられたからです。

“そして彼は猛者となり（文字通り、「猛者」とは砂漠の猛者であり、強健で独立的、かつ孤高で御される事の無いという、彼とその子孫の特徴を表現したものです。この呼称は決して、野蛮人, あるいは、それに似た意味を示しているのではな

く、自然の荒々しい不毛の地で生き残れる者という意味を持っています。）、その手は全ての人に立ち向かい、また全ての人の手は彼と対立し、彼は全ての兄弟と［対面した形で］共存する事となるでしょう（創世記１６：７－１２）。

これらの予言の示唆するところは、今日のベドゥイン族アラブ人達に最も濃厚に表れています。ジャマイソン氏（**Jamaison**）・フォーセット氏（**Faucett**）・ブラウン氏（**Brown**）共著である『**The Critical and Experimental Commentary**（批評的かつ試験的な解説書）』には、「彼は全ての兄弟と共存する事となるだろう。」と記述され、彼がたとえ兄弟と共存していても、その個性的な敵対心を保つと書かれています。それからまた他にも地理的な解釈をするならば、“東へ一東方へ”には、彼は、特にアラビアで、全ての兄弟と共存する事となるだろう。』（第１巻１５０ページ）と書かれています。

この予言は現実のものになりました。アラブ人の人口が最も集中しているのは,彼らが常に永住している中東です。アブラハムの甥ロトと彼の二人の娘との間の近親相姦関係によって産まれた,二人の非嫡出子エドムとモアブは,“静かに安住し”彼らの古からの地に留まると予言されています。彼らは今日その地で暮らしています。

イシュマエルは、まさしく予言通りにアラバ（または砂漠）で暮らしました。アブラハムが死去された時、イシュマエルはイサクと他の子孫達と共にその傍らにいました。“そして、アブラハムは再び妻を迎えた。その名をケチュラといった。

“そして彼女は、彼にジムラン、ヨクシャン、メダン、ミディアン［モーゼスの妻はミディアン人、すなわち、アブラハムの子孫にあたります。］、イシュバク、さらにシュアを産み与えた。

“そしてヨクシャンはシェバとデダンを産んだ。デダンの息子達はアシュル人、レトシム人、レウミム人であった。

“それからミディアンの息子達であるエファ、エフェル（原語発音：アイファー）、ハノク、アビダ、エルダアは、皆全てケトラの子孫にあった。”

“そしてアブラハムは彼の富を全てイサクに与えた。

“しかしアブラハムは彼と妾達の間にできた子供達には、贈り物を与え、まだ自分が生きている内に、東方の地へ、東の国へと追いやり、彼の息子イサクから遠ざけた。（創世記２５：１－６）当然この行いは、それら全ての息子と孫達１９名の胸の内に鋭い嫉妬心を引き起こし、彼らは次のように思ったに違いありません。「イサク同様、アブラハムは我等の父である；それなのになぜ我等はイサクより劣った扱いを受けなければならないのだ？“自分が「長男」である事を知っており、その為イサクを嫌悪していたイシュマエルは、特に腹を立てていたことでしょう。

事態はアブラハムの死と共にさらに発展していきました。「なお、これらがアブラハムの百七十五年にわたる生涯の主要な日々の出来事だった。

“そしてアブラハムは老人として長寿を全うし、その魂を開放し［「息を引き取り」、または、人生を終え］た。こうして、彼は彼の民（先祖・家族）の元へ還っていった。

“そして彼の息子イサクとイシュマエルは、マムレに面した、ヒッタイト人ゾハルの息子エフロンの土地にあるマクペラという洞窟に彼を埋葬した。

“その土地はアブラハムがヘテの子孫から買い取った土地であり、アブラハムとその妻サライはそこに埋葬された。

“そしてアブラハムの死後、主はその息子イサクを祝福し、イサクはラハイロイの井戸の側で暮らした。（注：これは、ハガルとまだ幼児だったイシュマエルを救った井戸と同じものです。その名は「幻視の生命の井戸」、または「主を謁見後の命の井戸」を意味しています。）これも、イシュマエルの深い嫌悪感の一因だったのかもしれません。なぜなら、イシュマエルは主が自分と母の命をお救いになられたその荒野のオアシスを、奇跡の地と見なしていたに違いないからです。

“なお、サラのエジプト人の召使いハガルが、アブラハムに産み与えたイシュマエルの系図は次のとおりである。

“また、イシュマエルの子孫の名を世代順に挙げると、長男のネバヨトに始まり、ケダル、アドベエル、ミブサムとなり、

“そしてミシュマ、ドマ、そしてマッサ、

“ハダル、テマ、エトル、ナフィシュ、そしてケデマである。

“これらがイシュマエルの子孫であり、十二人の王子として、それぞれの国の町や居城にも反映された彼らの名前です。（注：ケダルと他のイシュマエルの子孫達は、２０００年の歴史を持つ大都市ティレ「原語発音：タイアー」と貿易を交わしたと伝えられている。）（創世記２５：７－１６）

エゼキエルの予言によると,“デダンは鞍に使う高級な生地を、あなたと取引した。

“アラビアとケダルの全ての王子達はあなたの顧客であり、子羊、雄羊、山羊を用いて、あなたと交易した。

“シバとラアマの商人はあなたの顧客であり、あなたと最高級の香料と高価な宝石と金で取引を行った。」（エゼキエル書２７：２０－２２）

ダビデは「ケダルのテントの中で」一時匿われていた事があると語っており、その場所を遊牧民の住む東方の地と述べています。（詩編１２０：１－７には、次のように書かれています。「苦難に苛まれる中、私は主に救済を求めた。（彼はイシュマエルの民の間で暮らしていました。）すると、主はそれをお聞き入れになった。

“主よ、どうか私を［ケダルのイシュマエル人の］偽りのくちびると欺きの舌からお救い下さい。

“偽りの舌よ、お前をどうしてやろうか。いったい何を与えてやろう?

“お前は、強者の鋭い矢で射抜かれ、燃え盛るヒノキの木炭で焼かれるといい。

“メセクでの滞在、ケダルのテントの中の暮らしは、私にとって不幸そのものだ！

“私は長い間、平和を憎む者達と暮らしてきた。

“私は平和を好む、しかし私が発言する度に、彼らは争おうとする。”これは、全世界が今日のイスラエルとアラブ間に見いだそうとする”中東和平プロセス”の葛藤

そのものの様に見受けられます。

イシュマエルはかなりの高年齢で亡くなりました。「そしてこれが、イシュマエルの百三十七年にわたる人生だった。こうして、イシュマエルはその 魂 を開放し［息を引き取り］、彼の民（先祖・家族）の元へ還っていった。

“そしてイシュマエルの子孫は、エジプトからアッシリアの方角に位置する、ハヴィラからシュルにかけた地域に居住した。こうしてイシュマエルは、彼の親戚すべてに見守られて亡くなった。[この広大な地域は、シナイとガザ・ストリップから今日のイラクとクルジスタンに横たわっています].”

詩編83章の予言の詳細に注目し、それが今日のイスラエルとイシュマエル人達、そして、その同盟国との関係にどのように反映しているかに気をつけてみて下さい。”神よ、黙する事なかれ。神よ、静寂や不動を保つこと無かれ。

“ご覧下さい。あなたの敵は騒動を起こし、あなたを嫌う者達が頭角を現しております。

“彼らはあなたの民に対して奇策を張り巡らし、あなたの大切な人達に対して陰謀を企てております。

“彼らは言います、<u>『さあ、彼らの国そのものを滅してやろう。誰の記憶にもイスラエルという名が残らぬように。』</u>（これこそが全てのイスラム教徒の目標であります！これは、イスラエルの国を文字通りに抹消したがっている、ＰＬＯと多くのテロリスト団体が書き記した目的そのものです！].

“彼らは一致団結で画策し、あなたと敵対する同盟を結んでいます。（ユダヤ人に対する継続的な苦悶についての対処法を話し合うために、イスラム国家間で幾つもの「首脳会談」が開かれてきました。];

“エドムのテントの住人、イシュマエル人、モアブ人、そしてハガル人”ハガル“の名によって、これらの人々がイシュマエルの子孫であることを示している事にご注目下さい];

“ゲバル、アモン、アマレク、そして、ペレステ人[現代の”パレスチナ人”]とティレの原住民;

“アッシュールも加わり、彼らはロトの子孫を助けた。セラ」（詩編８３：１－８）。アッシュールは現代の「ドイツ」です！「アモン人」は、ロトと彼の娘達との近親相姦による子共、モアブとアモンの子孫でした。アモンは自らの名をとって、ヨルダンの現代の首都を”アマン”と名付けました。

さてここで、中東の人々に対する予言と、彼らの最終的な運命に注目して下さい。特にヨルダンに住むアラブ人を含めた、中東の幾つかの国のハシミテ王朝由来の民について、神はこう仰せられます。”人の子よ、アモン人に対面し、彼らに対して宣告するがよい;

“アモン人にこう伝えるがよい。『主なる神の言葉を聞きなさい。主なる神はこう仰せられます。お前は私の聖地が汚され、イスラエルの地が荒廃し、ユダの家の者達が捕われの身となった時、それをよしと嘲笑った;

“よく聞くがよい，*それ故に*私はお前を東の民に所有物として授けることにした，彼らはお前の土地に陣営を張り、住居を構え、お前の果物や乳を飲食するであろう。[ダニエル書１１：４０－４５と比較して下さい].

“私はラバをらくだの家畜小屋とし、アモン人の居所を羊の休息場としよう。そして、お前は、私が主であると思い知るのだ。

“主なる神はこう仰せになります；お前はイスラエルに対する悪意に心躍らせ、手を叩き足を踏み鳴らした;

“よく聞くがよい,それゆえ私はお前の頭上に手を伸ばし,他の国々が好きなだけ強奪できるようお前を引き渡す,そしてお前を人々から分け隔て,それらの国からお前を抹殺しよう: そして、お前は私が主であると思い知るのだ;（エゼキエル書２５：１－７）.

ヨルダン、イラク、又はサウジアラビアの誰一人として、エロヒムが神だと知っている者がいるかは疑わしく、彼らの“神”は偽りの定義でとんでもない虚構です。”そして彼らは私が”永遠の” [イスラエルと誓約関係にあるヤハウェまたはエホバ

だと知るだろう]”という表現は、エゼキエルの予言に頻繁に記述されてります。イスラム教アラブ人達は、イエス・キリストという人の姿を借りたのが、ハガルとイシュマエルを救った神と同一の存在だということを知りません！

ヨハネの福音書」第一章とヘブル人への手紙第一章に見られる明白な記述を学ぶ事により、誰もがこの大切な真理を理解出来るはずです。

さて、ここでモアブ、セイル［ヨルダンとトルコの東にある岩山と渓谷地帯］そしてエドムに関する予言に注目して下さい。「主なる神は仰せられる。モアブとセイルが、ユダの一族は他の国の者達と同様だと言ったので;

“故に、見よ、私はモアブの国境に位置する最も栄えた都市ベテエシモテ、バアルメオン、キリアタイムを手始めに、モアブの横腹を露出させ,

“彼らをアモン人諸共、東方の人々に所有物として引き渡そう, これらの国々でアモン人が存在していた事すら思い出される事が無くなるように。

“そして私はモアブ人に審判を下し、彼らは私が主であると思い知るでしょう。

“主なる神は仰せられる；エドム[エドムはエサウ：現在のトルコ]はユダの家に敵対、報復し、彼らに復讐を果たす事で大罪を犯した；

“故に主なる神は仰せられる; 私はエドムにも手を伸ばし、そこから人と獣を消滅させ; テマン[”オスマン－トルコ帝国.”の名はテマンに由来し,古代トルコの主な部族の一つが”テマン人”だったのです];を始めとしてその地を荒廃させよう。そして、デダンの民は敵の剣によって滅びるだろう。

“そして、私は我が民イスラエルの手を介して、エドムへの復讐を果たすだろう。彼らは私の憤りと激怒に従って行動し、エドムの者達は私の報復を思い知ることになるだろうと、主なる神は仰せられる”（エゼキエル書２５：７－１４）.

さてここで,稀にしか読まれ,あまり広く理解されていないオバデヤ書の予言に注目して下さい。それは主の日とキリストの再来直後の結果について書かれた書です。”オバデヤの予見。主なる神はエドム[“エサウはエドムのこと：創世記３６：１９]; につい

てこう仰せられる。私達は主からお話を賜りました。使者が一人諸国に遣わされこう言います、立ち上がれ、そして敵に対して戦いを挑もうではないか。

“見るがよい、私はお前を諸国の中でも特に弱小なものとし、お前は忌み嫌われるだろう。

“岩のはざま[”セイル” 山は、エドムに関連した形で何度も言及されています], に住む者よ,その居を高く構え心の内で,誰が私を地に引き摺り下ろす事など出来ようかと呟く者よ。お前自らの慢心が、お前を欺く事となった?

“たとえお前が鷲の如く飛翔し、星々の間に巣を架けたとしても、私はお前を引き摺り下ろして見せようと、主は仰せられる。

“もし盗賊がお前を訪れたり、強盗が夜中にやって来ても、（お前はなんと悲惨な目に遭うことか！）彼らは必要なだけしか盗んでいかないのではないか? もし誰かがお前のぶどうを収穫に来たら、少しのぶどうを残していくのではないだろうか?

”だが、エサウの物資はしらみつぶしに物色されよう！その隠された財宝まで探し荒らされることだろう！

“お前と手を組んだ者全てが（詩篇83章を参照）お前を国の境まで追いやるだろう: お前と和を結んでいた者はお前を騙し、打ち負かすだろう; お前が食を分け与えた者は、お前の元に罠を仕掛け、お前はそれに全く気付かないだろう。

“主は仰せられる。私がエドムから賢者を抹消し、エサウの山からは知識そのものを取り除く日がやってくるだろう?

“そして聞け、テマン[主要部族：第一次世界大戦中にカイザーと同盟を結び、英国のアレンビー将軍に敗れた] ”オスマン帝国” の名の由来、お前の戦士達は驚愕し、終いには、エサウ山の者全てが虐殺され絶えるだろう。

“お前は弟のヤコブ[後にイスラエルと改名される]に対する暴力の為、その身は恥に包まれ永遠に追放される事となろう。

“その日お前は関心も見せず唯一人立っていた,よそ者が彼らの富を強奪し、異国の

者達がその門に押し入り、エルサレムをくじで分け合っていた時、お前はあたかも彼らの一員の様に振舞っていた。[注：数世紀もの間、トルコは、エーゲ海と黒海に挟まれた世界で最も重要な”海門”の一つボスポラス海峡/ダーダネルス海峡-にまたがって存在し、ロシアにとって唯一の不凍港を提供していました].

“だがお前は兄弟が連れ去られたあの日、それを楽しげに傍観するべきではなかった。ユダの子孫の滅びの日も、これを喜ぶべきではなかったし、彼らの苦難の日に、声高に驕り高ぶるべきではなかった; [大患難時代中に起こると言われる、未来のイスラエルの捕虜化については、エレミヤ書３０：１－１１を参照して下さい]。

“お前は、私の民の災厄の日に、その門に押し入るべきではなかった。そうとも、その災厄の日に、お前は彼らの苦痛を傍観するべきではなかった。ましてや、その災厄の日に、彼らの富に手を出すべきではなかったのだ;

“さらには,お前は難民を切り捨てるために,その逃げ道に立ちはだかるべきではなかったし,その災厄にまみれた都市に残った生存者を引き渡すべきではなかったのだ。

“主の日が全ての国に訪れる日、お前は自らの行いをその身に受け、お前の報いはおまえ自身の頭上に降りかかって来るだろう。

“お前が私の聖なる山で飲酒したが為に、全ての国の者達も飲み続ける事となろう。そうとも、彼らは飲むに飲み下すが、正に初めから存在していなかったかのようになるだろう。

“だが、シオン山に救いが来る日（なぜなら、救世主が訪れるからです！）、そこは聖なる地となるだろう。そしてヤコブの家はその富を得るだろう。

“さらに、ヤコブの家は火と化し、ヨセフの家は炎そのものになる; [ヨセフはエフライムとマナセを意味します！], そしてエサウの家は刈り株となり、彼らはエサウを燃え尽くすだろう。こうしてエサウの家に生存者はいなくなると、主は仰せられたからである。

“そして南（ネゲヴ）の住人はエサウの山を捕らえ、平野（シェフェラ）の住人はペリシテの平原を占領する。また彼らはエフライム領地とサマリア領地を

得、ベンジャミンはギレアドを獲得する事となる。

“イスラエルの子孫の捕虜の一団は,ザレパテに到るまでのカナン人の土地を得,セファラドにいるエルサレムの捕虜達は、南（ネゲブ）の都市と町を勝ち取るだろう。

“こうして救世主達[複数形です！キリストが後半の第二期(大艱難時代後の七年奉仕を開始する時,復活した聖人達が彼に加わるのです！）は、エサウの山を裁く為にシオン山へ登られるだろう:そして王国は主の物となる”（オバデヤ書１－２１）

こうした中東に関する多くの予言から判断すれば、これは確信出来る事です！アブラハムの不忠儀な子孫やイサクの兄弟達を罰するのは、米国や英国の役割ではないのです！全能の神が、個人や国の罪に応じて、それぞれの国を裁くことでしょう！

大患難時代と主の大いなる日に起こる最後の激痛は、イスラエルと戦った全ての国に対する神の裁きによるものです！但し、これはパレスチナにある現在の「イスラエル」に限られたものではありません！それは特に、アメリカ合衆国と英国の事でもあるのです！私の著書『**Europe and America in Prophecy（予言におけるヨーロッパとアメリカ）**』をまだ読まれていない方は、無料コピーを１－（９０３）５６１－７０７０にてご注文下さい。また、当方のホームページ「**www.garnertedarmstrong.org**」でお読み頂くか、ダウンロードする事も可能です。尚、「イスラム」の起源を理解し、モハメッドの生涯についてお読みになりたい方は、私の小冊子『**Mideast Strife, Will It Lead To Armageddon?（中東紛争：それはアルマゲドンに繋がるのだろうか。）**』をどうぞご覧下さい。